久野部遺跡発掘調査報告書

一七ノ坪地区II一

1980

滋賀県教育委員 ^ 町教育委員 賀県文化財保護協

はしがき

「高度成長」から「低成長」へと時代の流れは、大きな変化をみせ、それに伴い 埋蔵文化財をめぐる諸環境も大きな振幅をもってゆれ動きつつある。しかし、県下 の開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査の件数そのものは、「高度成長」以来増加 の一途をたどっており、久野部遺跡の所在する野洲町は、特にその現象が顕著な地 でもある。

今回の調査は、別項で詳述されているように、阪急電鉄株式会社による宅地造成 工事に先立つ第3次調査の成果を収めたものである。阪急電鉄株式会社を始め、本 書作成に御努力下さった関係者各位に改めて御礼申し上げたい。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会 文化財保護課長

澤 悠 光

- 1. 本書は、野洲町久野部字七ノ坪に所在する阪急電鉄株式会社分護住宅計画地の 埋蔵文化財包蔵地についての発掘調査報告書である。
- 2. 本調査は、阪急電鉄株式会社の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会、野洲町教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。
- 3. 現地調査および報告書の作成には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護 課技師大橋信弥が担当し指導した。
- 4. 調査・整理には、財団法人滋賀県文化財保護協会技師谷口 徹氏の全面的な協力を得たほか、井入 勉・川立長司・川原崎鉄也・山下一也・塩田 敏・国松千夏・大田智鶴の諸君が参加し、井口なつ、井上芳子の両氏に現地作業の援助を願った。又、遺物写真には、寿福 滋氏を煩した。記して謝意を表したい。

なお、現地調査にあたっては、野洲町教育委員会社会教育課主事古川与志継氏、 阪急電鉄株式会社土地経営部管原正義氏の協力を得た。記して謝意を表したい。

久野部遺跡発掘調査報告書

一七ノ坪地区Ⅱ一

目 次

111 152	
はしがき	
例言	
1. 10. 0 0 1	
11: 座人的水池	
ш. и п. н. ш.	
14 . 144 15. 141 16.	
1. 坐1 工/	
= - 113	
6 · 72 177	
(1) 土 器	
(2)	
V. おわりに	21
	The second of
	図 版 目 次
	遺跡航空写真
	全景(西より)
PL. 3 1.Atı	re. 全景 (北西より) 2. Btre. 全景 (南西より)
	re. 全景(南東より) 2. Dtre. 全景(南西より)
	re. 全景(北西より) 2 . Ftre. 全景(南東より)
	DI検出状況(南東より) 2.SKI検出状況(北東より)
PL. 7 1. SI	D I 出土土器 2. S D I 出土木製品
PL. 8 遺構全	図(折り込み)
PL. 9 トレン	チ断面図(折り込み)
PL. 10 SDI	出土土器(E1~E4)・木製品(W1~W4)実測図
	挿 図 目 次
第1図 野洲町内	3遺跡位置図······ 2
第2図 富波遺跡	·地区位置図
第3図 久野部遺	遺跡地区位置図
第4図 和田遺跡	,地区位置図7
第5図 トレンチ	· -設定図14

I はじめに

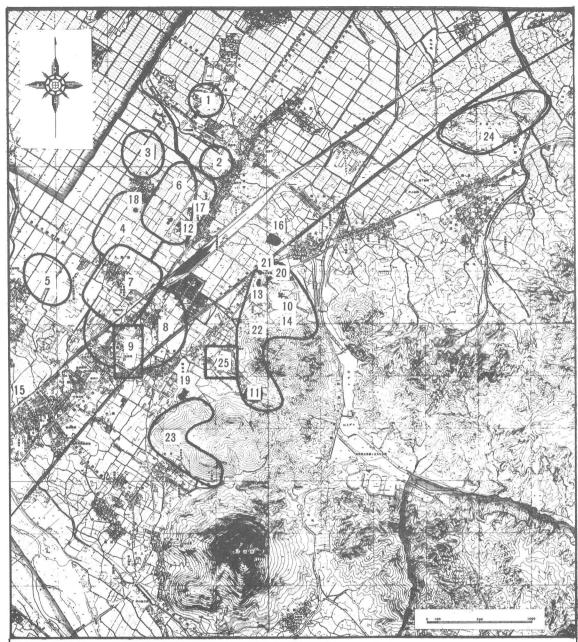
本書は、昭和54年4月4日から昭和54年4月24日まで、およそ1ヶ月を要して実施した、滋賀県野洲町久野部所在、久野部遺跡七ノ坪地区の発掘調査の成果を収めたものである。当該地は、昭和52年2月~5月、滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会が、阪急電鉄株式会社による宅地造成工事に先立って調査実施した地点に隣接しており、今回、同社が当該地を取得、造成計画を策定されたため、遺構の関連も考えられるところから、同社の依頼により、第三次調査を実施することになったのである。

今回の調査区は、前回C区とした部分の東側にあたり、C区一帯に広がる沼沢地の縁辺部と考えられ、当初から遺構の存在はあまり期待されていなかった。そして調査結果も、以下の通り、それほど顕著なものではなかったが、近年調査が進展している久野部遺跡と和田遺跡の一端を示すものとして、貴重な資料を提供するものと思われる。

(大橋信弥)

註

- (1) 大橋信弥・別所健二・谷口 徹『久野部遺跡発掘調査報告書―七ノ坪地区―』(滋賀県教育委員会、野洲町教育委員会、1977)。
- (2) 別項でも述べられる通り、前回調査以降、久野部遺跡で6ヶ所、和田遺跡で8ヶ所の調査が実施され、多数の遺構、遺物が発見されている。これらの成果を十分活用して、この地域の遺跡保存に真剣に取りくむ必要を痛感している。



野洲町内遺跡分布図

- 1. 江部遺跡
- 2. 三堂遺跡
- 3. 高木·下繰子遺跡
- 4. 五之里遺跡
- 5. 市三宅遺跡
- 6. 富波遺跡
- 7. 久野部遺跡
- 8. 和田遺跡
- 9. 野洲郡衙推定地
- 10. 大岩山銅鐸出土地

- 11. 東浦遺跡
- 12. 古富波山古墳
- 13. 天王山古墳
- 14. 大岩山第2番山林古墳
- 15. 大岩山古墳
- 16. 大塚山古墳 17. 亀塚古墳
- 18. 五之里古墳
- 19. 越前塚古墳
- 20. 円山古墳

- 21. 甲山古墳22. 大岩山古墳群
- 23. 妙光寺山古墳群
- 24. 夕日ケ丘遺跡
- 25. 福林寺廃寺

II 歴史的環境

近年、野洲町内における開発の波は著しく、それに付随した発掘調査の件数もおびただしいものがある。以下、調査によって明らかにされた個々の成果を概観し、時代の流れをたどってみたいと思う。

1、**江部遺跡** 「野洲郡野洲町江部遺跡」ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ-I 1977

1976年11月、永原字田軍田の管原神社東側の水田が調査された。その結果、平安時代頃と推定される掘立柱建物や溝などが検出され、調査地区のほぼ全域に遺物包含層が存在し、平安時代を主体とする遺物の混入が認められた。この地一帯に平安時代の集落址が広がる可能性がもたれる。

又、江部遺跡に隣接する管原神社は、これまでに古瓦の散布が報告されており、白鳳~奈良時 代と推定される寺院跡(永原廃寺)の所在が考えられている。

なお、調査地の南側には、かつて天井川である家棟川が東南から西北方向に流れており、現在、 その河川敷が周囲の水田にくらべやや高まりをなして、往時の面影を伝えている。

2、三堂遺跡

富波甲字三堂および字天神付近に広がる遺跡である。1979年の調査によって、鎌倉時代頃の多量の土器片とともに、井戸・柱穴群・炉跡状の遺構を検出している。その他、古墳時代後期の遺物も混入しており、この期の遺構も存在するものと考えられている。

3、高木・下繰子遺跡

- ① 高木地区 「高木遺跡調査概要」ほ場整備事業にともなう文化財調査報告II 1975 当地区では、古墳時代初頭(庄内式併行期)の良好な一括資料を得た大型楕円形土城(当 初、貯蔵穴として利用されたものと考えられる)を始め、多数の柱穴・溝等を検出している。
- ② 下繰子地区 「野洲町下繰子遺跡」ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ II 1976 「野洲町下繰子遺跡発掘調査報告第2弾」大谷大学考古学研究会 1976 「野洲町下繰子遺跡N地区」ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ I 1977 「野洲町下繰子遺跡E・S地区」ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ II 1977

当地区の調査の結果、高木地区同様に古墳時代初頭(庄内式併行期)を主体とする竪穴住居址の残骸 6 棟・旧河道・井戸 1 基・溝・土拡・柱穴多数を検出している。竪穴住居址は、 微高地上の最も高い箇所を選定して構築しているようであり、方形ないし隅丸方形プランを保つ。そのうち 1 棟は他の竪穴住居址と趣を異にし、両壁溝から 1.3 m前後内に入った箇所で、おのおの対応するように 5 ピットが並列し、溝によって壁溝に連接している。間仕切りの機能をなすのであろうか。旧河道は北東から南西へ流路を保ち、柱様の大木 2 本と杭・矢

板からなる堰状遺構を伴っている。この旧河道から、おびただしい量にのぼる土器・木製品・ 動植物遺体等が出土した。

4、五之里遺跡 「五之里遺跡発掘調査報告」滋賀県文化財調査年報 1976

1976年の夏から冬にかけて調査されたものである。北西の微高地上は、弥生時代中期から古墳時代前期に至る方形周溝墓・土壙墓などによって墓域を形成している。その東はやや低平地化して、南から北と東から西へ流れる多条の溝が確認され、それらの溝をへだてた東端で、新たに方形周溝墓と土壙墓からなる墓域が存在する。

北西の墓域では、東側に方形周溝墓 9 基が露見し、西端に至って甕棺・木棺などを含む土壙墓が群在している。両者間を画する施設は存在しない。なお、方形周溝墓群には、各周溝墓に囲まれながら周溝墓の構築されない空間があり、その空間には 1×1 間の掘立柱建物が 5 棟以上存在する。こうした空間の所在は、守山市服部遺跡においても指摘される所であり注目されよう。

東端の墓域では、東側で方形周溝墓が1基検出され、西側には土壙墓群が広がっている。やはり、両者間を画する施設はみられない。

5、市三宅遺跡

1971年、野洲駅 裏に所在するI・ B·M(野洲工場) 建設工事に際して、 古墳時代前期の土 器片が出土し、一 部試掘調査が実施 されたが、溝以外 に明確な遺構を確 認しなかった。そ の後、1972年度の ほ場整備事業に際 して、市三宅の現 集落の東南部より 古墳時代後期に相 当する多量の遺物 が採集されており、 古墳時代の大規模 な集落址がこの地 に広がる可能性が



十分考えられる。

6、富波遺跡

① 古トバ地区 「富波遺跡調査報告」滋賀県文化財調査年報 1973

1974年春、古富波山古墳の調査に併行して調査されたもので、鎌倉時代を主体に各期の遺物が出土した。遺構として鎌倉時代に掘開されたと考えられる隅丸方形周溝状遺構がある。その性格については定かでない。出土遺物の中には、輸入陶器・白磁・青磁及び緑釉陶器などが含まれており、富波庄との関連が注目される。

② 郷前地区 「野洲町富波遺跡調査報告II」滋賀県文化財調査年報 1976

1976年5月から6月にかけて調査された。明確な遺構の検出がなく、水田化される以前においては、調査区のほぼ全域が沼沢地を形成していたものと想定され、それに関連する杭列を確認している。

③ 竹ノ花地区

1976年夏から翌年にかけて、1974年度の調査のつづきとして北西部分が調査された。その結果、古墳時代初頭以降の各期の遺構・遺物が出土し、平安時代の掘立柱建物群の他、古墳時代中期と推定される円墳・帆立貝式古墳(5世紀後葉)の残骸各1基、そして掘立柱建物群、土拡、溝などを検出している。ただ、現在、未報告の段階にあり、詳細は不明である。

1977年11月、竹ノ花地区の北東隣接地が調査されたが、総柱の倉庫2棟の他、井戸・竪穴住居址等を検出した。竹ノ花地区に連続するものと思われるが、詳細は不明である。

⑤ 山路地区 「五之里遺跡発掘調査報告―富波工区―」滋賀県文化財調査年報 1976 1976年の夏より冬にかけて行なわれた五之里遺跡の発掘調査に付随して調査されたものである。その結果、隅丸方形プランを保つ竪穴住居址6棟、倉5棟、土址29基、その他大小の柱穴多数を検出した。詳細な検討から、2棟の竪穴住居址に1ないし2棟の倉を持つ単位が、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて3世代に渡り存続したと推察されている。

7、久野部遺跡

① 七ノ坪地区 「久野部遺跡発掘調査報告書―七ノ坪地区―」滋賀県教育委員会 1977 当地区は、久野部遺跡の北限、富波遺跡の南限にあたり、三上の辺より久野部を通って 五之里に向かう微高地の端部に位置している。北東はしだいに比高を減じて、野洲川と家棟 川の自然堤防によって形成された後背湿地が広がる。

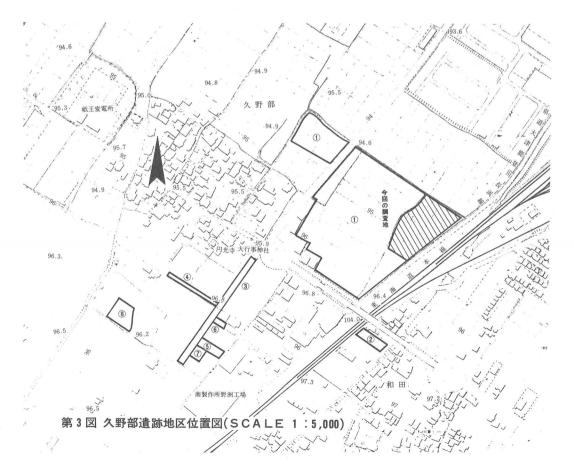
久野部遺跡の北限にあたるA区では、同遺跡の北を限ると思われる数条の溝が流路をおよ

そ南から北に保っている。1条の溝からは、弥生時代後期の良好な一括資料を得ている。その他、掘立柱建物1棟、土址若干が検出されている。

富波遺跡の南限にあたるB区では、総柱からなる倉庫様の掘立柱建物1棟、土城多数の他、条里に規制された溝2条などが検出され、それらは12世紀以降に、後背湿地の縁辺部を一部整地して構築したものである。文献にみえる「富波庄」との関連で注目される。後背湿地の広がるC区では、それに開口する7世紀代の溝を検出している。

- ② 十ヶ坪地区 「久野部遺跡発掘調査報告書―野洲郡野洲町久野部字十ヶ坪所在―」滋賀県教育委員会 1977 当地区は、久野部遺跡の東端近くにあたり、この地の南東には和田遺跡が広がっている。 遺構として弥生時代後期の掘立柱建物(1×2間~1×3間)3棟、溝、土址が確認された 他、時期不明の土址等が露見している。
- ③堂ノ前地区 ④見舞田地区(A) ⑤見舞田地区(B) ⑥ ⑦見舞田地区(C)(D) ⑧見舞田地区(E) 「久野部遺跡見学会パンフレット」野洲町教育委員会 1979

1975年秋の町道建設に伴う事前調査(堂ノ前地区)で久野部遺跡の一端が露見して以降、同年末(見舞田地区A)、1977年末(見舞田地区C・D)、1978年夏(見舞田地区B)、1979年秋(見舞田地区E)



と小規模な発掘調査が矢継早に行なわれた。その結果、南の和田遺跡や野洲郡衙推定地に接する広大な地に遺構が連綿と続くことが明らかとなり、見舞田地区(E)の調査によって久野部遺跡の西辺を限ると思われる沼沢地が露見した。

検出した遺構は、弥生時代末から鎌倉時代までの長期にわたる。弥生時代末から古墳時代 初頭にかけては、1×2・3間の総柱からなる倉庫様の建物・竪穴住居址・溝・土址などが幾 多発見されるとともに、見舞田地区では沼沢地に接する微高地の縁辺部で方形周溝墓が露見 している。古墳時代後期より平安・鎌倉時代にかけては、多数の掘立柱建物や棚列・井戸が 発見され、特に倉庫様の建物が多い点で留意される。

8、和田遺跡

① 和田前地区(A) 「昭和52年度和田遺跡確認調査中間報告(その1)野洲町教育委員会 1977 1977年夏に調査されたものである。北東側はしだいに比高を減じており、久野部遺跡七ノ坪地区や、富波遺跡郷前地区に連なる沼沢地が広がるものと思われる。調査の結果、掘立柱建物5棟、土垃3基、井戸1基、方形周溝墓2基、溝状遺構9条等を確認している。掘立柱建物は、直径70㎝前後の掘り方をもち、方位は正南北及び条里制地割(N-34°-E)に近いものの2様からなり、いずれも総柱になるものと推定され、倉庫様の建物である可能性が高



い。土地は、埴輪片を出土したもの、焼土を混入しているものなどがある。井戸は石組みの存在した可能性がある。方形周溝墓からは、古墳時代初頭の受口状口縁甕1個体が出土しており、同期の遺構であろう。溝状遺構は、古墳時代後期を主体とし、いずれも南から北へ流路を保っている。

② 和田前地区(B) 「昭和52年度和田遺跡発掘調査報告書」野洲町教育委員会 1978 通称「掘削地A」と称している。和田前地区(A)に連続する方形周溝墓1基の他、小溝・柱穴等を検出している。

③ 和田前地区(C)

通称「掘削地B」と称している。和田前地区(A)や(B)に連続する遺構が存在したものと思われるが、東側に現存する溝のため全体に遺存状況が悪く明らかではない。古墳時代の土師器片や須恵器片が出土している。

④ 和田前地区(D)

1975年度に調査されたものである。和田前地区(A)と(B)で発見された方形周溝墓に連続すると思われる方形周溝墓2基が確認された他、近世・近代の遺構を検出している。

⑤ 和田地区(A)

和田前地区(D)とともに、1975年度に調査されたものである。近世、近代の遺構を確認 している。

⑥ 和田地区(B)

1976年度に試掘されたもので、通称「試掘第3地区」と称している。若干の不定形な落ち込みを確認している。

⑦ 和田後地区

1976年度に試掘されたもので、通称「試掘第2地区」と称している。北流する数条の溝の他、若干の柱穴を検出している。

⑧ 横枕地区 「和田遺跡説明会―野洲町小篠原字横枕―」野洲町教育委員会 1979

1979年夏に調査されたものである。調査地区西側で柱穴群・土坂多教・井戸1基の他、多条の溝を検出している。東側は、しだいに比高を減じて中央付近で低湿地が介入するが、さらに東には方形周溝墓1基の他、土城、井戸、小溝等が若干露見している。西側の各溝は、大旨低湿地の縁辺部に沿って北流するものと、低湿地に流れ込むものの2様に大別される。北流する溝の中には、精巧な土馬を出土したものがあり、共伴した須恵器から7世紀代の溝と

考えられる。低湿地は、古墳時代以前に既に存在したものと思われる。東の方形周溝墓は、 3箇所に陸橋部をもち、古墳時代初頭頃に構築されたものであろう。

(9) 金ヶ糸地区 「和田遺跡説明会(2)―野洲町小篠原字金ヶ糸―」野洲町教育委員会 1979

1979年秋から冬にかけて調査されたもので、横枕地区の南隣に位置する。中央付近には横 枕地区に続く多条の溝が大旨南から北へと流れている。各溝は古墳時代後期から飛鳥時代頃 を主体とするようである。これらの溝の東側には、小規模な掘立柱建物が数多く存在する他、 繩文時代晩期の土器片や打製石斧が出土している。一方、西側には西端近くで0.8~1.0mを 計る大きな掘り方を持つ総柱の掘立柱建物が2棟(2×3間と3×3間)存在し、倉庫であ る可能性が高い。その他、栅列・小規模な掘立柱建物・土拡等を検出しており、栅列は2棟 の倉庫様建物とともに正南北に近い方位を示している。この地は、野洲郡衙跡推定地の北辺 部にあたり、郡衙なしは東山道の駅家等の関連で留意されよう。

⑩ 初田地区

1978年度に調査されたものである。古墳時代後期の土器片が散布しており、方形に画する 溝が露見している。

- - 1978年度に調査されたもので、通称「堂ノ後(2)地区」と称している。調査の結果、掘立柱建物 2 棟、土址 4 基、溝 2 条などを検出している。掘立柱建物は直径0.5~0.6 m のやや大形の掘り方を保つ 5 × 2 間以上の建物と、直径0.3~0.4 m の掘り方をもち 3 × 数間の片庇付き建物が考えられる。後者は、ほぼ正南北方位をなす。 1 条の溝からは、滑石製紡錘車が出土している。各遺構は、7 Cから平安時代初頭に構築されたものである。当調査地区は、郡衙推定地特殊(正南北)地割の南辺より 4 町目にあたり、各遺構に南北あるいは東西方向に近い方位の多い点が留意されよう。
- ② 堂ノ後地区(B) 「昭和52年度和田遺跡発掘調査報告書」野洲町教育委員会 1978 1978年度に調査されたもので、通称「堂ノ後(1)地区」と称している。調査の結果、奈 良時代から平安時代初頭を主体とする井戸・土城・溝・柱穴等を検出している。井戸には曲 物を内蔵していた。当調査地区は、郡衙推定地特殊地割の南辺より3町目にあたり、溝を始

め南北あるいは東西方向に近い方位を保っている点が留意される。

① 六ノ坪地区(A)

1976年度に調査されたものである。多数の柱穴の他、古墳時代後期頃の竪穴住居址残骸 2棟、古墳時代後期から奈良時代の遺物を包含する幅広い水路などを検出している。

(A) 六ノ坪地区(B)

1976年度に調査されたもので、六ノ坪地区(A)に南接する箇所である。先の水路の延長部が露見した他、多数の掘立柱建物群、弥生時代末と古墳時代後期の竪穴住居址、井戸2基を検出している。水路からは殺牛馬信仰を想起させる遺体がみつかり注目されよう。

(E) 六ノ坪地区(C) 「昭和52年度和田遺跡発掘調査報告書」野洲町教育委員会 1978

1976年度に調査されたもので、通称「六ノ坪地区」と称している。調査の結果、平安時代中・後期から鎌倉時代を主体とする井戸1基、25基にのぼる土城、溝11条の他、多数の柱穴を検出した。井戸は方形井側を内蔵している。溝は正南北に近い大溝が1条知られる以外はいずれもN-34~Eに近い方位を示す。出土遺物は、黒色土器椀、土師質皿など日常雑器類を主としている。

16 西今地区

1974年暮に調査されたもので、和田遺跡調査の初源をなす。調査の結果、北辺にカマドを持つ6世紀代の竪穴住居址数棟の他、掘立柱建物群の一端が明らかとなった。

9、野洲郡衙推定地

① 西堂地区 「野洲郡衙推定地第1次確認調査概要報告書」野洲町教育委員会 1976 1975年夏に調査されたものである。南北に近い溝状遺構の他、若干の掘立柱建物を検出し たが、郡衙関係の遺構と断定しうるものは露見していない。

② 下池田地区

1979年に調査されたものである。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居址が多数発見された他、古墳時代後期より飛鳥、奈良、平安時代に至る井戸・掘立柱建物・棚列・溝等を検出している。

なお、野洲郡内がN-34℃Eの条里制地割を広範に遺存するのに対して、当該域は凡そ正南北の方位を持ちいわゆる特殊条里(特殊地割)が広がる。その広がりは、東西2町、南北4町に及び、その周辺、殊に東と西側には条里制地割との間に非条里地をもっている。又、古道との関連でみると、旧東山道(近世には中仙道)が野洲川を渡って東北方向に進み、特殊地割の南中央に至って急に東西に方位をかえ、2町余進んで更に東北方向に抜ける。一方、西側には朝鮮人街道が走るなど交通の要衝に位置している。こうしたことから、この地に野洲郡衙を始め篠原駅など公的機関が想定されてきた。

郡衙は、律令期における地方の単位としての郡域の支配を行なう中枢をなすが、平安時代の後半頃になると、郡そのものが東西あるいは南北に二分されて呼ばれることが多く存在したようである。野洲郡についても、中世末から近世初頭にかけての古文書に北部・南部の名

が散見される。従って、この段階では野洲郡衙が二箇所に存在した可能性があり、野洲町及 び中主町域の大半は、野洲北郡に相応するものと考えられている。

10、 大岩山銅鐸出土地

小篠原丘陵の一角、通称大岩山周辺から、明治年間に14口、1962年には10口の銅鐸が出土 している。

11、東浦遺跡

1977年、企業庁にかかる下水道工事の試掘調査において、大岩山と妙光寺山の谷合奥部より弥生時代中期に遡る土器片が出土している。

12、古富波山古墳 「栗太・野洲両部に於ける二・三の古式墳墓の調査報告」考古学雑誌12-2 1921 「富波遺跡調査報告」滋賀県文化財調査年報 1975

古富波山古墳は、平地に占地し、盛土のみで墳丘を構築した前期古墳(庄内式併行期?)である。古墳の規模・形態については、墳丘が大きく削平を受けており、かつ周溝が認められないので明確な所は不明であるが、直径約27m前後、高さ1.7m以上の円墳と考えられる。主体部等についても定かではないが、明治年間に開墾中、北隅の表土下約3尺位の土中より舶載鏡3面が相接して出土し、付近に朱が散布していたことが知られる。鏡は「陳氏作四神二獣鏡」「王氏作四神四獣鏡」「三角縁三神五獣鏡」の3面である。「陳氏作四神二獣鏡」は、フリア美術館蔵品中に同范鏡がある。

13、天王山古墳

大岩山の西麓部の一小丘(通称天王山)を利用して築造されたものである。全長約42mの前方 後円墳であり、前方部が大きくバチ型に開いている。後円部には石材が露出しており、竪穴式石 室の天井石である可能性が高いといわれる。勾玉・管玉が出土している。

14、大岩山第2番山林古墳 「栗太・野洲両郡に於ける二・三の古式墳墓の調査報告」考古学雑誌12-2 1921 大岩山の山腹丘陵上に築造されたものである。墳形は円墳であったと推定され、1921年の砂防 工事中に露呈した粘土槨内から鏡5面、剣身1口が発見されている。鏡は、「獣縁紋尚方盤龍四 神鏡」「三角縁盤龍虎獣帯鏡」「三角縁陳氏作神獣車馬鏡」「三角縁日月天王獣文帯二神二獣鏡」 と平縁式小鏡片である。

15、大岩山古墳

通称天王山の東にある高峰から更に東北に延びた丘陵端に築造されたものであり、墳丘及び主体部は不明であるが、1876年に鏡3面、勾玉、鏃7個、管玉8個が出土している。現在、知恩院に「変形神獣鏡」「三角縁獣帯三神三獣鏡」の彷製鏡2面を蔵している。

16、大塚山古墳

辻町の北西の水田中に立地し、墳丘の全長が50.5m以上の二段築成からなる帆立貝式古墳である。馬蹄形の大規模な周濠を備えており、5世紀中葉から後半期に築造されたと推定される。

富波乙の生和神社に沿った中ノ池川のほとりの水田中に立地する。墳丘の全長は30m以上と推定され、墳形は帆立貝式と考えられる。5世紀中葉から後半期に築成されたものであろう。

18、五之里古墳 「五之里遺跡発掘調査報告」滋賀県文化財調査年報 1976

1976年の五之里遺跡の調査に付随して、当古墳の周濠の確認を主とする調査がなされた。その結果、墳丘は確定できなかったものの、幅約2.0mの狭い「濠」を検出し、多数の埴輪片の他、5世紀代の須恵器が出土した。又、この古墳の東側でも埴輪片や須恵器(5世紀後葉)が多数散布することが知られ、新たな古墳の存在が推定されている。

19、越前塚古墳

妙光寺山山麓部の独立山丘上に立地する前方後円墳である。全長69mを計り、小規模な石材を 小口積み的に利用する古相の横穴式石室を有する。墳丘上には葺石が散見され、埴輪も伴出した といわれている。5世紀末葉から6世紀前葉の築造と考えられる。

20、円山古墳

大岩山山麓部の山丘上に立地し、墳丘は円形をなすが、北東端に低い張り出し部が存在することから帆立貝式古墳と考えられている。巨石を用いた横穴式石室をもち、巨大な家型石棺を内蔵する。家型石棺は、二上山系凝灰岩でピンク色を呈す。葺石・埴輪をもたず、墳頂部は平坦で土師器片の散布が知られる。6世紀前葉に築造されたものであろう。

21、甲山古墳

円山古墳に同じく大岩山山麓部の山丘上に立地する円墳である。巨石を用いた横穴式石室をもち、巨大な凝灰岩の家型石棺を内蔵している。葺石・埴輪をもたず、6世紀前葉の築造と考えられる。

22、大岩山古墳群 (宮山古墳群・天王山古墳群・天王山南古墳群・天王山西古墳群・桜生古墳群・福林寺山古墳群)

横穴式石室を主体部とする群集墳が、大岩山山麓一帯に分布する。その中には、円山・甲山両 古墳に後続すると推定される宮山1号、2号の両古墳が存在し、1号墳は横穴式石室内に花崗岩 の石棺を安置し、又、2号墳には箱式棺を用いていることで知られる。その他、墳形が方形プラ ンを保つ7号墳やT字型の石室をもつものなどがあり、新幹線工事に伴う土取り工事に際して地 下式土址が露見したといわれている。

23、妙光寺山古墳群

越前塚古墳の背後にある妙光寺山山麓一帯に、横穴式石室を主体部とする中規模程度の群集墳が築造されている。おおよそ300基前後が群集しているものと思われるが、その実体は明らかでない。

24、 夕日 ヶ丘遺跡 「野洲郡野洲町大篠原地域遺跡見学会の資料」近江考古学研究会 1978

当遺跡の所在する大篠原地域は、東隣の竜王町とともに、古代における一大窯業地帯をなしたと考えられ、各所に須恵器窯跡が確認されている。命脈は、6世紀中頃にはじまり比較的短期間であるが、その数はおびただしいものがある。又、最近、それら須恵器窯跡に付随して瓦窯跡が発見され、近在の山腹には群集墳が多数築造されてもいる。

25、福林寺廃寺

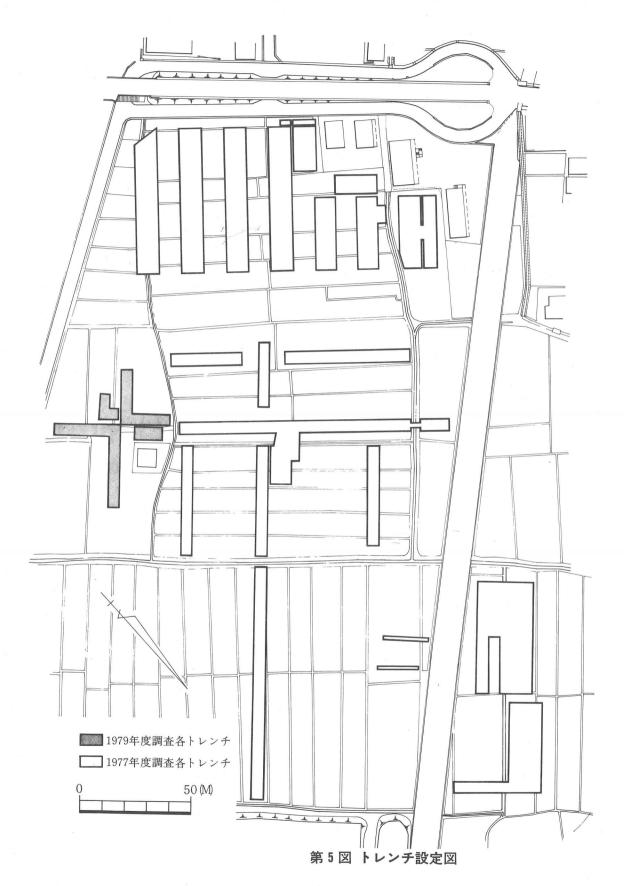
白鳳時代のある時点、この野洲の地に2つの寺院が建立されたといわれる。1つは江部の天満 宮を中心に寺域が広がっていたと推定され、もう1つがこの福林寺廃寺である。

福林寺は、東寺文書に収める弁官宣旨によれば、天武天皇の代に石城村主宿禰が鎮護国家の奉為に建立したものという。大岩山の南西麓にあって、現在は野洲中学校の校地となっており、先年、校舎の増築に際して一部試掘調査が実施されている。その結果、白鳳時代から室町時代までの瓦が出土しており、白鳳期から中世末期まで存続したとする古文書とも齟齬しない。

現在、野洲町教育委員会は、町内全域にわたる分布調査を継起的に実施している。近い将来、 その成果が明らかになれば、以上の概要も一段と体系的なものになろうと予想され、同時に乱開 発に抗する適切な対応処置が講じられるものと期待される。

なお、以上の概要をまとめるにあたって、野洲町教育委員会社会教育課主事古川与志継氏には 各種の御援助をいただいた。文末ながら記して感謝の意を表したい。

(谷口 徹)



Ⅲ 調 査 経 過

当区の発掘調査は、1979年4月4日より開始し、同年4月24日に至って終了するまで約20日間を要した。

当初、遺構の出土様相をさぐるために当区を大きく四分割し、それに沿ってA~Dの各トレンチを設定した。その結果、遺構が露見した箇所では、遺構の延び具合から考慮して、随時拡張区(Etre. Ftre.)を設定し、その全容が明らかになるよう努めた。

各遺構は、耕土層と床土層の直下に広がっていたが、近年の攪乱溝及び農耕のための暗渠・鋤跡等が縦横に走っており、そのために破壊を受けたり確認が不可能となったものも少なくなかった。各遺構の掘開を完了後、下層からさらに新たな遺構が検出される可能性もあるため、断面観察及び排水等を兼ねて四分割ラインに即した十字の試掘溝をA~Dの各トレンチに設けた。しかし、人為性の考慮される新たな地山は確認できなかった。

なお、C・D・E・Fの各トレンチは、北東一帯に広がる沼沢地への傾斜を深めていだいに比高を減じており、遺構の遺存状態は必ずしも良好とは言い難かった。加えて湧水が著しく、ヨシ等の繁茂にも悩まされるところであった。

(谷口 徹)

調 査 日 誌(抄)

4月4日(水)はれ

●明日より、すみやかに調査を開始するため重機(ユンボ)を始めとする作業道具、備品等の運搬及びトレンチの設定を行なう。トレンチは調査区を大きく四分割し、いわゆる四分法に基づくA~Dの各トレンチを設定した。トレンチ幅は、重機の可動範囲から考慮してとりあえず5mとした。断面観察は、調査区の全容ができる限り把握できるよう四分割に即したものにすることを調査員全員で確認した。

4月6日(金)はれ

●昨日の雨で調査区がぬかるんでおり、排湿を兼ねて、Atre. Btre.の側溝掘りから調査を開始した。重機は Atre.の北西より掘削を始めた。その結果、一部の攪乱土、次いで耕土層、床土層の直下に黄褐色粘土からなる地山が露見した。地山には、ほぼトレンチに平行する幅2m余の攪乱溝が走っている。用途は不明であるが、攪乱溝が埋没の後、再び水田として利用されている。ただ、新たな水田は床土を形成するまでには至っていない。Atre.の南西隅で数例のピットを、又、南東側で北から南に走る溝(SDI)を検出する。

4月7日(土)くもり

●Atre. の全体を清掃して写真撮影を行なう。

- ●重機は、Btre. の北東より掘削を開始する。Atre. 同様の攪乱溝を合計 5 条、又鋤跡を 1 条 確認すれど、他に遺構らしきもの検出されず。
- ●Ctre. の側溝掘りを行なうが、湧水著しくポンプを常設する。

4月9日(月)はれ

- Atre. の断面観察及び排水を兼ねて北東側を一段下げる。新たな遺構面は確認されず。断面 実側(1/20)完了。
- ●重機は、Btre. 完了後Ctre. の南東より掘削を開始する。

4月10日(火)はれ

- Atre. で検出した若干のピット及びSDIを掘開する。SDIから土師器片が出土。掘開後、SDIの写真撮影と断面実測(Sec. ①、Sec. ②——1/10)を行なう。
- ●重機は、Ctre. の掘削を継続。ヨシ等の根が一帯に深くはびこり、又、湧水が著しく調査は 困難を極める。
- ●Dtre. の側溝掘りを開始する。

4月11日(水)はれ

- Btre. の全体を清掃して写真撮影を行なう。
- ●重機はCtre.の掘削を完了する。Ctre.では、SKIを検出した他、1条の攪乱溝、竹片等を遺存する暗渠、数条の鋤跡、又、造成用に掘開・埋置した水道管の掘り方等を確認した。
- ●Dtre.の側溝掘りを完了する。

4月12日(木)はれ

- ●Btre.の断面観察及び排水を兼ねて南東側を一段下げる。地山第2層の灰褐色砂礫層が一部 隆起するのを確認するが、遺構を伴なう層ではない。断面実測完了。
- ●Ctre. の全体を清掃して写真撮影を行なう。つづいてSKIを掘開すれど遺物皆無。
- 重機は、Dtre. の南西より掘削を開始する。

4月13日(金)はれ

- Atre. Btre. 両トレンチの平板実測(1/50)を行なう。
- ●重機は、Dtre.の掘削を完了する。その結果、トレンチ中央は掘り込まれてゴミ捨てに供されており、遺構確認が不可能であった。結局、ピット2例を検出した他、縦横に走る鋤跡を多数確認するにとどまった。

- 4月14日(土) くもり のち はれ
 - ●重機は、Ftre. の北西より掘削を開始し、SDIのつづきを確認するが、地山のレベルが低下するため遺存が悪く、ついに消失する。念のため南東にもトレンチを若干拡張してみたが、やはり確認できなかった。

4月17日 (火) 雨 のち くもり

- ●昨日、そして朝方の雨のため、既掘の全トレンチの排水を行なう。又、図面作業が多くなり、我々のみでは調査に対応しきれなくなったため、作業員の応援を依頼した。
- Ctre. の断面観察及び排水を兼ねて南西側を一段下げる。地山が、レベルの下降に伴ってグライ化し青灰色を呈するようになる。断面実測を完了する。
- S D I が、Atre.の北東に延びる事が予測されるため、Atre. と鉄塔の間にEtre.を設定し、 側溝掘りを行なう。
- ●重機は、写真撮影が良好に行なえるように、排土の整理をする。

4月21日(土)はれ

- ●19、20両日の雨のため既掘の全トレンチの排水を行なう。
- ●Ctre. Dtre. 両トレンチの平板実測を行なう。
- Dtre. の断面観察及び排水を兼ねて北西側を一段下げるが、新たな遺構面は確認されず。断面実測完了。
- ●重機は、Etre.の南東より掘削を開始し、完了する。 SDIの延長部及びピット1例を検出する。その他、攪乱溝、鋤跡等を確認する。
- ●Ftre. のSDIを掘開の後、全体を清掃して写真撮影を行なう。

4月23日(日)はれ

- ●Etre. のSDI、ピット等を掘開する。SDIより土師器片・木製品等が出土する。
- ●Etre. Ftre. 両トレンチの平板実測を行なう。
- ●重機を撤去する。

4月24日(火)はれ

- ●Ftre. の全体を清掃して写真撮影を行なう。
- ●各トレンチを簡単に清掃して全景写真を撮る。
- ●トレンチ設定図作成用に1/500の平板実測を行なう。
- ●1/50の平板実測図にレベル測定の結果を記入し、本調査区の全調査工程を終了する。
- ●作業道具・備品等を集積し、確認の後、撤去する。

(谷口 徹・井入 勉・川立長司・川原崎鉄也)

Ⅳ 調査結果

1. 基 本 土 層

当調査区は、鈴鹿山地の御在所山にその源を発する野洲川の右岸にあり、野洲川が形成した比較的平坦な扇状地上に位置している。しかし、東及び南は、野洲川と家棟川の自然堤防によって形成された後背湿地状の沼沢地が広がるため、しだいに比高を減じている。もちろん、その比高差は、図版9の断面実測図にその一端がうかがわれるように、当初おだやかなものであったと思われるが、水田形成時、一枚の水田面をフラットな状態に確保するための削平と土盛りが繰り返されて、現在では各畦ごとに比較的大きな落差が形成されている。

最上層には、1976年春に阪急電鉄株式会社に取得されて以降の数次にわたる盛土がみられるが、その下には、以前の耕土(暗黒灰色粘質土層・I層)とその床土(黄灰色粘質土層・II層)が広がっていた。次いで、各水田の東及び南の畦近在には黒褐色粘土層(III層)が確認された。この層は若干の土器細片を混入しており、直下に広がる遺構の包含層である可能性が強い。水田形成時、先の要因によって削平を受けることのなかった東及び南の畦近在のみ、現在まで遺存したのであろう。上部で酸化マンガンの斑文が著しい他、全体に酸化鉄の糸根状集積がみられた。このIII層の下には、灰褐色粘土層(IV層)が広がっていた。今回検出した各遺構は、いずれもこの地山を切り込んで構築されている。全体に黄橙色で輪廓不鮮明な太い管状の含水酸化鉄沈殿物が顕著にみられ、下部ではグライ化した青灰色部と酸化した褐色部とがモザイク状に混り合っており、酸化と還元が反覆する地点であることを示していた。Btre. では、さらに下層の灰褐色砂礫層(V層)が一部顔をみせていたが、河川等による一時的な堆積層であるかもしれない。

なお、Atre. の北辺を走る畦は、坪界の可能性が考えられたが、断面観察において床土(II層)が畦下にも伸びているところから、極めて新しい畦であり、かつて野洲郡10条4里の2ノ坪と8ノ坪を画した坪界は、既に削平等の要因のため消失したものと思われる。

(谷口 徹)

2. 遺 構

基本土層の頃で詳述したように、耕土とその床土下で一部包含層と思われる黒褐色粘土層 (Ⅲ層) が介入していたが、その直下には灰褐色粘土層 (Ⅳ層) が広がり、今回検出した遺構はいずれもこの地山を切り込んで構築されている。遺構として確認したものは、若干の柱穴・土拡・溝である。

柱穴は、Atre. Dtre. Etre. から検出しており、いずれも黒褐色粘土を基調としている。のそれは、一辺30~40cmの方形の掘り方を保っている。掘立柱建物の一隅を形成していたものと考えられるが、現況では、その全容を明らかにするまでには至らない。

土城は、Ctre.で1例(SKI)を確認している。一辺1m弱のやや変則的な方形プランを呈している。覆土は、①黒灰褐色粘土層、②黒灰色粘土層の大きく2層よりなるが、両層とも遺物は皆無である。

講は、Ftre. Atre. Etre.の各トレンチ内を斜めに横切る形で検出(SDI)している。やや蛇行するが、その流路を南から北に保ち、前回の調査(A区)で確認した7条の溝にほぼ平行するようであり留意される。遺存の比較的良好なAtre.でみると、その形状は幅約1.0m、深さ約0.4mの浅い椀状を呈している。覆土は、①茶褐色粘土層、②暗黒褐色粘土層、③灰褐色粘質土層、④灰色粘質土層の4層に細分されるが、大きく褐色の粘土を基調とする上層(①、②層)と、灰色の粘質土を基調とする下層(③、④層)に大別される。遺物の出土は上層に限られ、下層は径10cm前後の円礫や砂粒の介入があって、当初流れが存在したことを物語るようである。

(谷口 徹)

註

(1) 大橋信弥・別所健二・谷口 徹『久野部遺跡発掘調査報告書―七ノ坪地区―』 (滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会) 1977

3. 遺 物

今回の調査では、包含層様のⅢ層、及びSDIから若干の遺物が出土した。包含層のそれは弥生式土器片、須恵器片などであるが、いずれも細片であり、計測するまでには至らない。結局SDIから出土した弥生時代後期の土器及び木製品について述べることにしたい。

(1) 土器

- 響(E1) 受口状口縁甕の口縁部である。口径は10.2cm前後と比較的小形である。口縁は、わずかに外上方へ伸び、先端は内傾する平坦面を有する。口縁立上がり部には櫛状工具による刺突列点文を施している。器体内外面とも、細かいハケ目調整を施した後、横ナデを加えて仕上げている。胎土、焼成ともやや不良であり、色調は淡褐色を呈す。
- 雲(E2) 底径が2.8cmと比較的小さく、やや上げ底気味で、受口状口縁甕の底部になるものと思われる。内外面をハケ目調整し、内面はナデて平滑に仕上げている。胎土、焼成ともやや不良であり、色調は淡褐色を呈す。
- 高杯(E3) 高杯の杯から脚に至る部分である。脚部の付根径は2.7cmを計る。杯部はおだやかに外彎して椀状をなし、下に筒状の支柱部が付く。杯・支柱部とも外面は縦に箆磨きの後、ナデて仕上げるが、わずかに箆磨きの痕跡を残している。杯部内面は、ハケ目調整した後、ナデて仕上げる。支柱部内面は、巻上げ・絞り目痕を指でナデ下ろして消している。胎土・焼成とも良好で、色調は赤褐色を呈す。
- 高杯(E4) 高杯の脚部である。脚部の付根径は2.0cmを計る。支柱部は付根の付近から「ハ」字状に開き、下端で1孔以上の小円孔を穿っている。器体外面にハケ目を施し、端部付近には横ナデを加えている。内面は絞り目痕を明瞭に残している。胎土・焼成とも良好で、色調は灰褐色を呈す。

(2) 木製品

- 板状品 (W1) 残存長13.5cm、残存幅3.4cm、厚さ0.4cmの一隅のみ遺存する板状品である。端部は両面より斜めに削り落とす面取りが施されている。スギ材の柾目板を利用している。
- 板状品(W 2) 残存長21.8cm、幅5.8cm、厚さ1.9cmの狭くて厚い板状品である。遺存する一端 は鋭く斜めに削り落として、断面が三角形を呈している。他端は腐植が著しく原形を留め ない。スギ材の板目板を利用したものである。
- 角杭 (W3) 残存長23.0cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmを計る比較的小形の角杭である。遺存する一端は両側辺より削り落として三角形を呈する。スギ材の柾目に近い部分を木取りしている。
- 板状品 (W 4) 残存長54.2cm、残存幅12.8cm、厚さ1.4cmの一隅を遺存する板状品である。遺存が悪く、全体に腐植を受けている。スギ材の柾目板を利用したものである。

(谷口 徹)

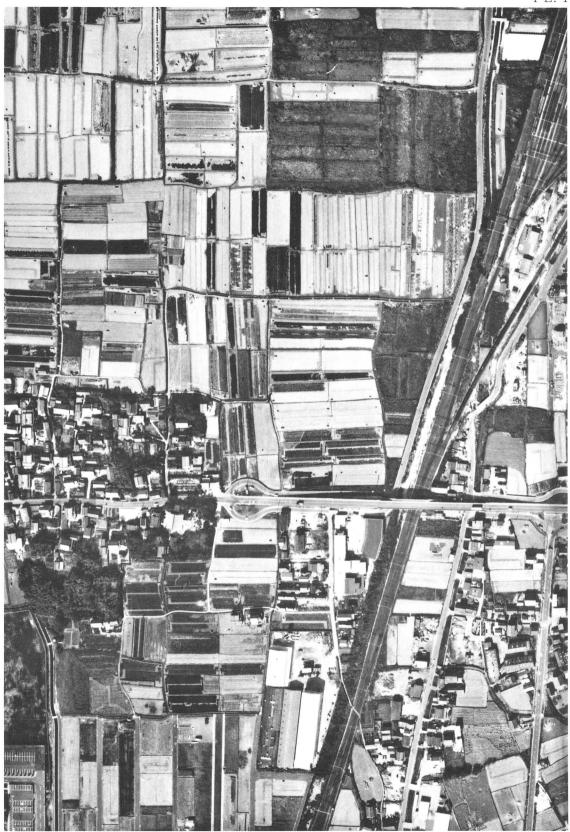
∨ おわりに

今回の調査地は、1977年に実施したC区の東側にあたり、東南に広がる沼沢地の縁辺部に位置している。遺構の存在は、当初の予想どおり若干の柱穴・土城・溝を検出したにとどまった。ただ、弥生時代後期に比定される溝は、前回のA区で確認した7条の溝同様、流路を南から北に保ち、沼沢地の縁辺部をかすめるように流れている点が留意されよう。

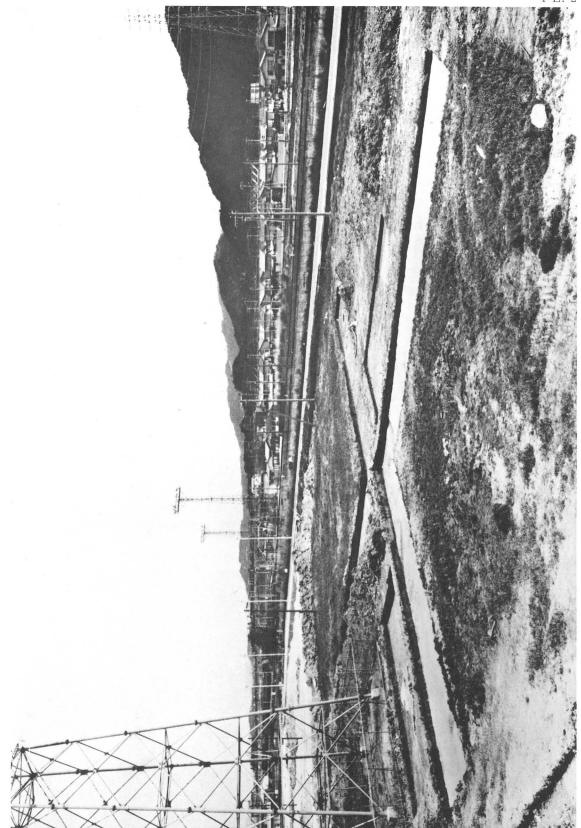
さて、今回調査した久野部遺跡を始め、野洲川の沖積作用による旧自然堤防上に位置する五之 里遺跡・和田遺跡・富波遺跡などは、多地点での調査の結果、いずれも互いに接して一大遺跡 群を形成していたことが明らかになりつつある。今後こうした遺跡群を射程に入れた、各時代ご とのさらに詳細でトータルな検討が要求されよう。

(谷口 徹)

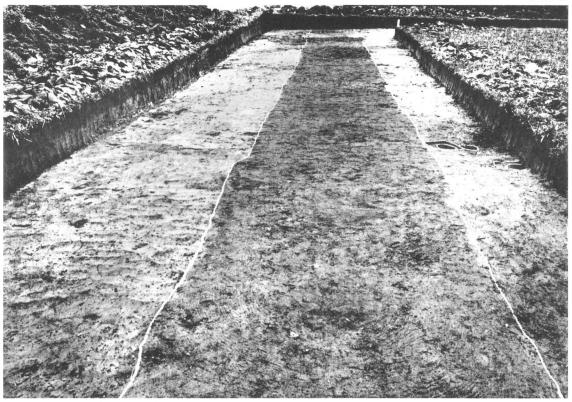
図 版



久野部遺跡航空写真



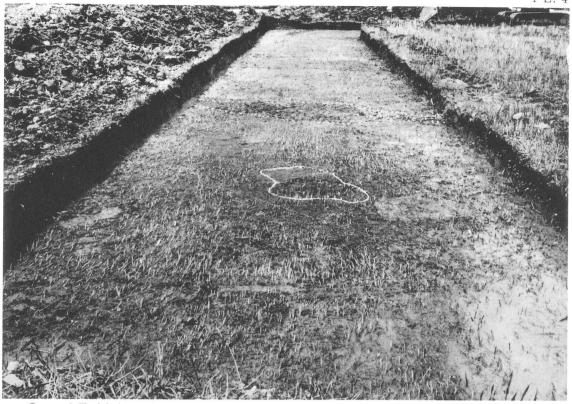
調査区全景(西より)



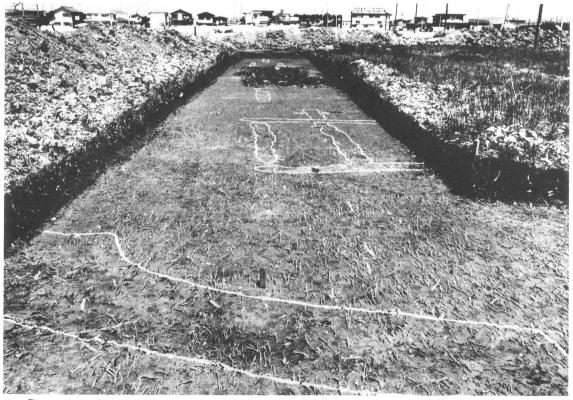
1、Atre. 全景(北西より)



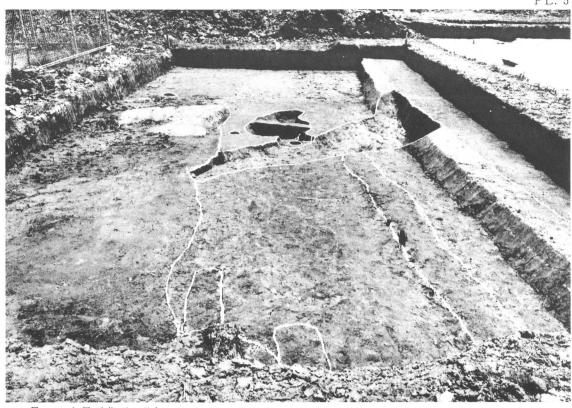
2、Btre. 全景 (南西より)



1、Ctre. 全景 (南東より)



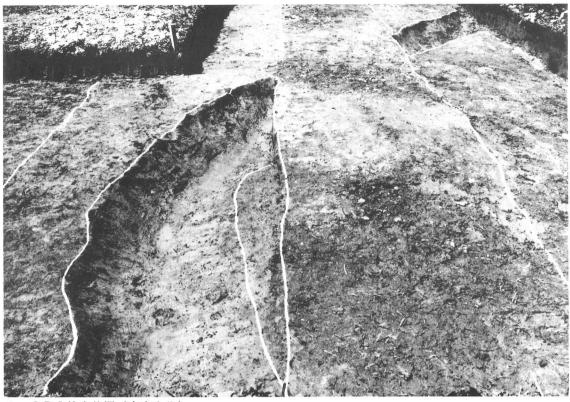
2、Dtre. 全景 (南西より)



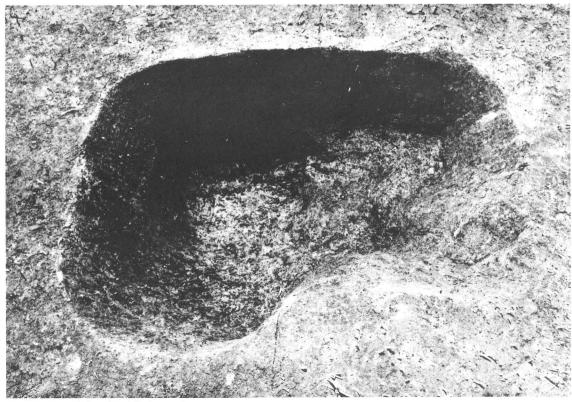
1、Etre. 全景 (北西より)



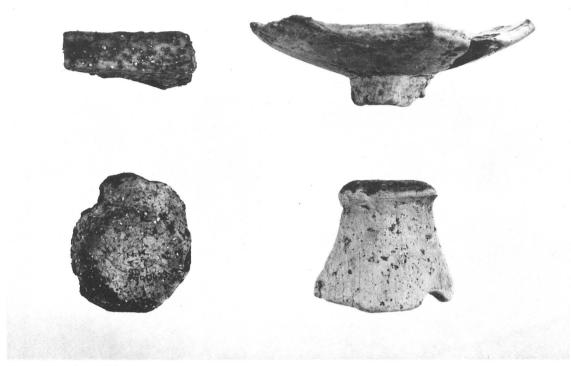
2、Ftre. 全景 (南東より)



1、SDI検出状況(南東より)



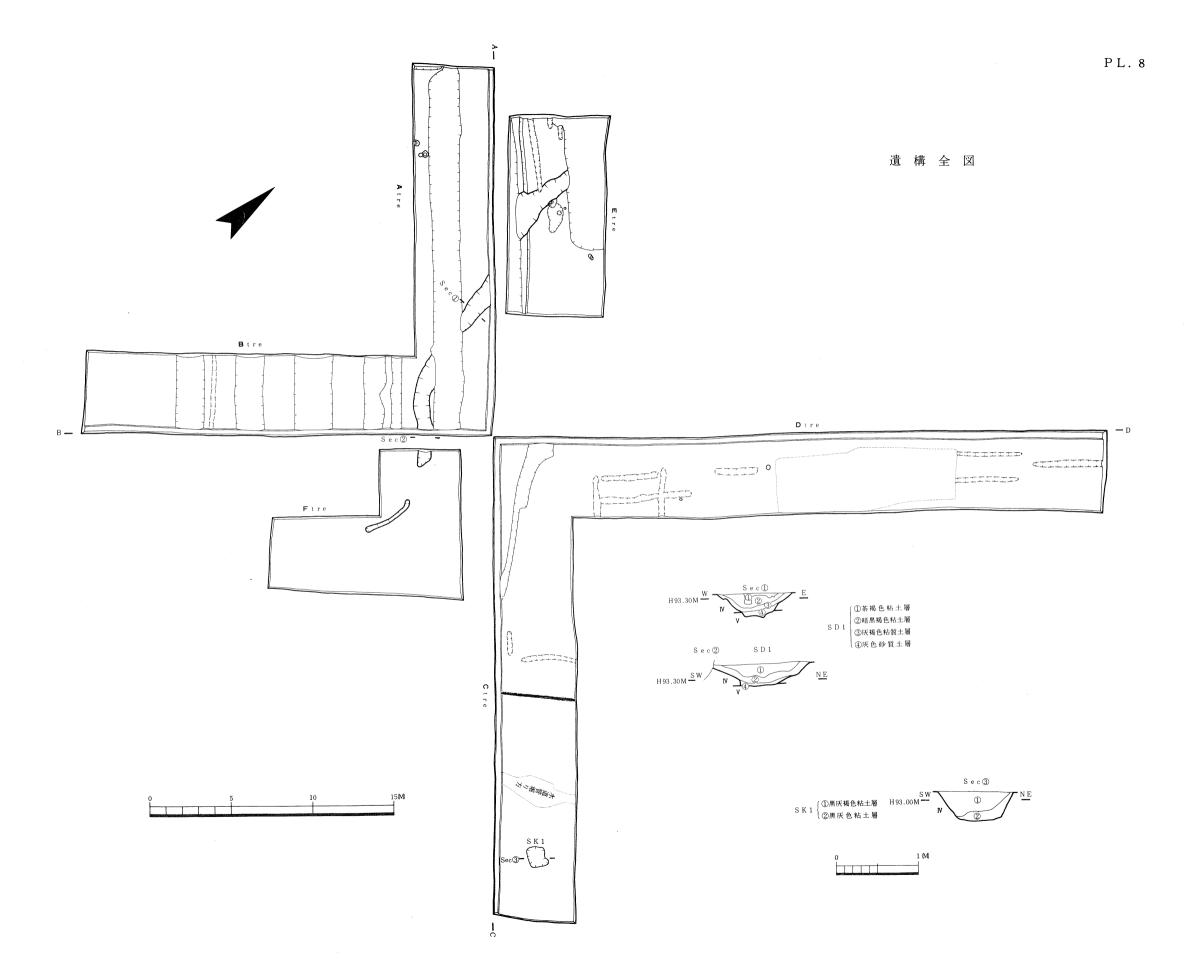
2、SKI検出状況(北東より)

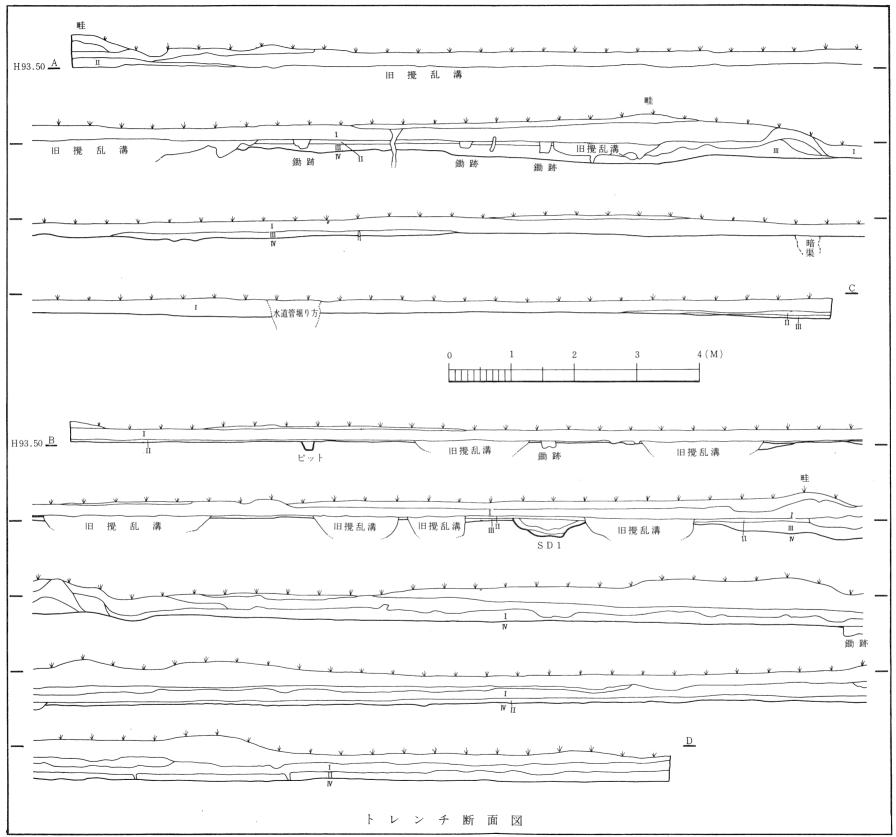


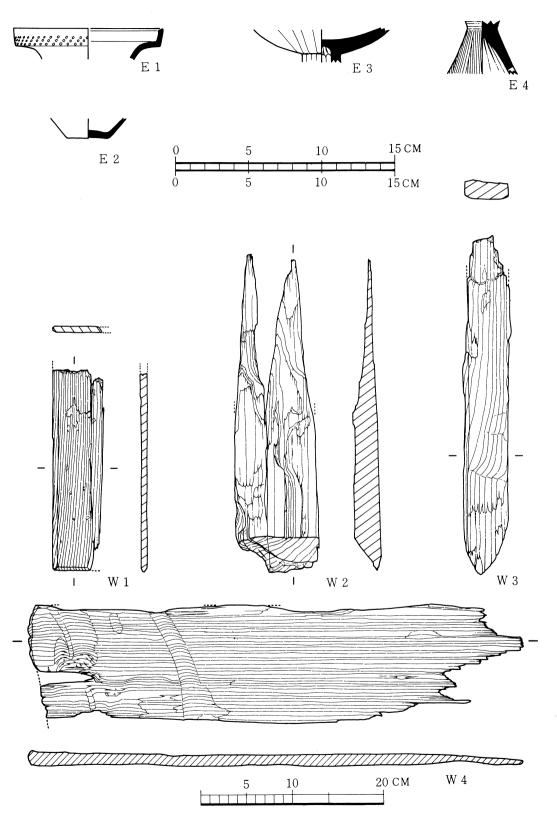
1、SDI出土土器



2、SDI出土木製品







S D I 出土土器・木製品実測図

久野部遺跡発掘調査報告書

---七ノ坪地区 **II**----

昭和55年3月

編集 滋賀県教育委員会会発行滋賀県教育委員会会野洲町教育委員会会(財)滋賀県文化財保護協会

印刷 明文舎印刷商事㈱